公共図書館での医療・健康情報サービスの可能性

－多治見市図書館の医療・健康情報サービス事例より－

中島ゆかり
多治見市図書館

【はじめに】

課題解決型サービスが、図書館業務の重要事項と言われるようになって久しい。しかし、課題を解決するためだけに図書館を利用する人は少なく、日常的に「本を読む」という行為のために来館する人が大半を占める。課題を解決するために来館する人を待つだけでなく、図書館側から積極的にアプローチして、既存の利用者はもとより、様々な理由で図書館を利用したことがない人たちに向けたサービスを展開する必要がある。

医療・健康情報サービスにおいても、病気を患っている人、健康な人、病気を患った後社会復帰を目指す人、それぞれに対応したサービスを多角的に捉えて働きかけていくことが求められる。そして、重い病気や障がいがあり図書館利用が困難と思われていた（それは大きな誤解であり、図書館側の怠慢だが）人たちに、図書館側から働きかけ、図書館が社会との窓口の役割を果たすことを伝えるべきである。コミュニケーションの手段はいくらでもあるのに互いが知り合う機会がないことが問題であり、図書館はその隙間を埋める役割を果たすべきである。多治見市図書館が行ってきた小さな取組みから、どのような広がりや可能性が生まれたか、これまで行ってきた事例をもとに考察したい。

【事例】

・県立多治見病院患者図書室との連携（闘病記文庫を礎に）
・保健センター及び市役所各課との連携（がんのことを知るための展示など）
・企業との連携（配布パンフレットがつないだ縁）
・利用者からの呼びかけにより実現した展示（映画「僕のうしろに道はできる」PR と世界ダウン症の日・世界自閉症啓発デーとのコラボ展示）
・ALS/MND グローバルデー展示における日本 ALS 協会からの展示資料の貸与

【考察】

県立多治見病院患者図書室の開室に併せた医療･情報サービス闘病記文庫の設置から、連携は広がりをみせた。「病気や障がいについての本がある」と利用者自身が気付いてくれる機会が増えた。そのことが縁となり、利用者とのコラボ展示が実現した。MIS のような研修会に参加することで出逢えた他県の図書館員のおかげで、患者会とのつながりを得ることが出来た。小さな取組みの積み重ねが、思わぬ連携を生み出す可能性がある。

課題は山積みだし、地域の包括支援サービスなどの一員として参加出来ていないのが現状である。しかし逆から考えれば、図書館が地域の中で果たすことが出来る可能性は無限大とも言える。前を向いて歩き続けていくことがきっと何かにつながっていく。